



五木寛之

# 青春の門

自立篇 下

講談社

青春の門 第二部 自立篇 下

著 者 五木寛之

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二―一二―二二  
〒一一二 振替 東京 三九三〇  
電話東京(〇三)九四五―一一一(大代表)

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

第一刷発行 昭和四十七年七月二十八日  
第十六刷発行 昭和四十九年五月二十日



©五木寛之 昭和四十七年 落丁本・乱丁本はお取り替えます。

定価は箱に表示してあります。

(文2)

Printed in Japan

## 目次

|         |     |
|---------|-----|
| 白い額の上に  | 5   |
| 暗闇の中の対話 | 22  |
| 内臓の街へ   | 33  |
| 幼い誤解    | 42  |
| 夜の迷路へ   | 48  |
| 人斬り英治   | 62  |
| 男の生き方   | 98  |
| ビールを投げる | 122 |
| 夏の谷間で   | 147 |

秋の誘惑

織江の失踪

秋雨の夜の事件

いざ去りめやも

乳房と大砲

未知の旅へ

269 232 218 193 180 165

表紙絵

さしえ

題字

装幀

菅

村山

甘林

豊夫

風間

完

青春の門

自立篇

下



## 白い額の上に

電車から降りると、信介はホームの端に激しい水しぶきをあげている雨脚を少し暗い表情で眺めた。雨は今朝からずっと激しく降り続けている。東伏見の駅までは新聞紙をかぶって駆けてきたのだが、それでもシャツがべったりと皮膚にはりついて、とても気持が悪かった。

へさて、と――

これから自分が果さなければならぬ役割を考えると、信介はいつそう重苦しい気分になった。

へだが仕方がない。もう約束してしまったんだからな

彼はちょっとため息をついて濡れた階段を改札口のほうへ降りて行った。

へあの人は来てるだろうか？

早瀬理子との約束は午前十時だった。もう十時を五分ほど過ぎている。信介は足早に改札口を抜

け、約束の新聞売場の前に立って周囲を見回した。

へどうしたんだろう」

理子の姿はどこにも見えなかった。信介は内心ほっとした気持をおぼえながら、街に降っている灰色の雨を眺めた。暗い空の下の家々の屋根は、動物の濡れた背中のようにだった。

へそれにしても妙なことになった」

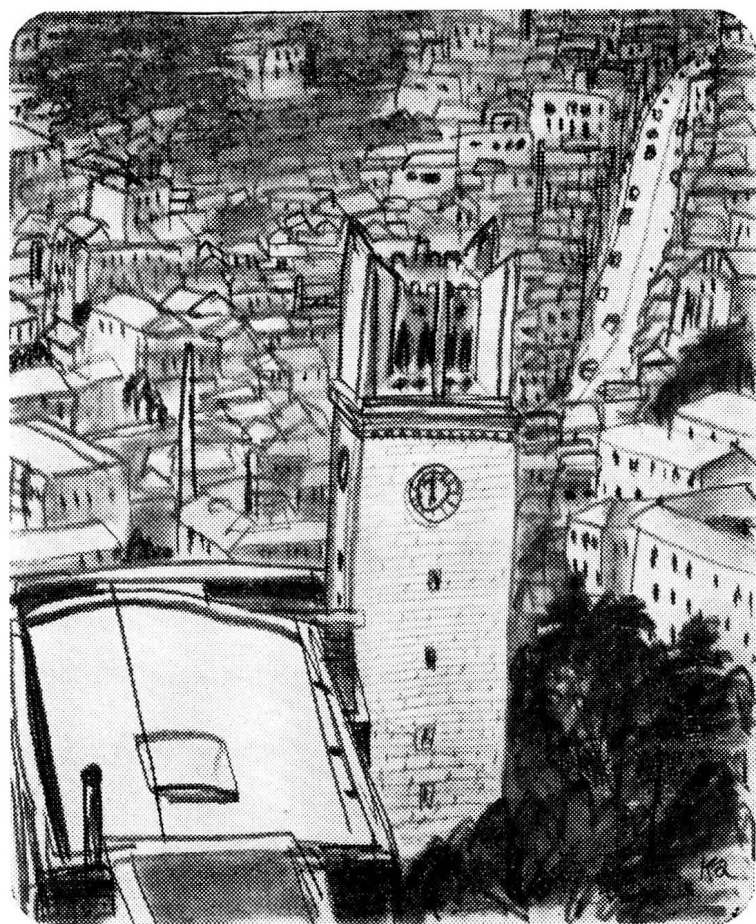
信介は雨のしぶきに足もとを濡らしながら、自分が今日こうして石井講師に内緒で早瀬理子を待つことになったいきさつを思い返した。それは一種の行きがかりめいた約束でもあったし、また彼の理子に対する好意のせいだったといえるかもしれない。いずれにせよ、それは昨日、信介が長塚の下宿から帰ってきた時に始まったのである。

きのうの夕方、信介は中野の長塚の下宿から出て、西武線の新井薬師の駅へ歩いて行き、そこから電車で東伏見へ帰ってきた。中央線から西武線までは、かなりの距離を歩かねばならなかったので、信介は足がだるくなってしまう、最後には冗談でなく、下駄をぬいではだして歩きたいくらいだった。歩くことには子供の頃から慣れていたが、それでもひどく疲れた。

帰りついてみると、石井講師はまだ帰っていない、暗い座敷の端のほうに、早瀬理子が一人ではつんと背中を丸めて坐っていた。

「どうしたんです、電灯もつけずに」

と、信介は驚いて言った。そんな彼女の姿勢に何か異様な感じをおぼえたのだった。



「おかえりなさい」

早瀬理子は、かすれた声で呟くように言い、それから大きなため息をつく、立ち上って縁側から庭へおりて行った。部屋の外もすでに暗く、空には赤い星がひとつ、鈍く光っている。

「気分でも悪いんですか」

信介はおずおずと早瀬理子の背後から声をかけた。理子は首を振って、弱々しく微笑した。白い理子の顔が、庭先で夕顔の花のように見えた。

「なんでもないの」

「そんならいけど——」

信介は石井講師が、理子が妊娠した、と言っていたことを思い出し、少し気になって声をかけた。「中にはいって横になってたらどうです。毛布を出しますから」

「いいのよ、伊吹くん」

理子は首を振って、かすかに微笑した。そして信介を手招きすると、

「それより、ここへ来てごらんなさい。風が気持ちいいわ」

「ええ」

信介はサンダルをつっかけて、理子の横に立った。彼女の体は心なしかタイトなスカートの前の部分がふくらんでいるように見えた。

「あたしね、今日、とってもみじめな経験をしたの」

と、早瀬理子が不意に言った。そして突然、信介の腕をつかむと、早口で喋り出した。

「小さな、汚らしい、設備も不充分で、能力のない看護婦と野卑な産婦人科医のいる医院の診察室で、あたしは——」

理子はしばらく言葉を切つてうつむいていたが、やがて自嘲的な口調で言った。

「そんな不愉快な場所、固いベッドの上に横になって、下着もなにもつけていない下半身をむき出しにしてさらしたんだわ。まるで蛙みたいに両脚を大きく開いて——」

信介はぐくりと唾をのみこんだ。理子は信介の腕から手をはなすと、両手で顔をおおって黙りこんだ。やがて髪を手でとかしながら、彼女は続けた。

「あたし、石井の赤ちゃんができたの。でも産めないのよ。彼は子供を作りたくないんですって。それであたしは、今日、医院に行ってきたの。大病院や、先輩のいるかもしれない大病院には行けないでしょう？ 悩んだ末に、水商売の女のひとたち専門に扱っている怪しげな産婦人科医のところを探して、独りで行ってきたのよ」

「……………」

「あなたも男だから、どうせわからなと思うわ。いまのあたしが、どんなにみじめな気持だか」

信介はしばらく黙っていた。それから勇気を出してたずねた。

「それで、その、手術を終えてきたんですか」

「ううん、それは明日なの。あたし、まだはじめてのことだし、出かけてすぐというわけには行かないわ。そのための事前の処置だけ今日してきたのよ」

信介が何も言えずに突っ立っていると、理子は突然、彼の肩に額を押しつけて、激しく泣きはじめ

た。熱いものが信介のシャツの上から彼の肌に伝わってくるのがわかった。

「さあ、部屋にもどって休みませんか」

信介は重く柔らかな理子の体を抱えるようにして部屋へ連れもどした。そして座布団を二つに折って枕にし、横にならせると毛布を出して彼女の体にかけた。

「ねえ、伊吹くん」

と、理子が言った。

「なんです」

「あなた、あす、あたしについてきてくださらない？」

「ぼくが？」

「だめ？ いやならいいの。無理にとは言わないわ」

「でも——」

「石井がくると言ってるけど、あたしはいやだわ。だって、産むな、と言ったのは彼なんですもの。

あたし、いま彼のこと憎んでるのかもしれない。愛してることは事実だけど。それでも嫌なの。あたしはあの人についてきて欲しくないわ」

「ぼくでいいいなら行きますよ」

と、信介は言った。「でも、子供をおろす手術のつきそいなんて、はじめてだからなあ」

「あたしだってそうよ」

理子は毛布から顔を出すと、光る目で信介をみつめ、お願い、と言った。

「はあ」

信介は理子の枕元に坐ったまま、暗い部屋の中で奇妙な欲望の目覚めるのを、うとましく感じながらうなずいた。それが、彼が思いがけず背負いこんだ約束だったのだ。

そしてその晩、石井講師は埼玉県の友人宅へ訪ねて行ったとかで夜おそく電話をかけてきた。

「おれは今夜は帰れないからな。ちょっと話がこみいつてきてるんだ。戸締りを頼むよ」

「理子さんがみえてますけど、いいんですか？」

「そうか」

電話の向こうで少し考える感じがあつて、石井は言った。「おれは今夜は帰らんと言ってくれ」

「あの、実はですね」

信介は理子が病院に行ったことを石井講師に言おうか言うまいかと迷つて口ごもつた。すると背後から冷たい手がのびて信介の手首をつかんだ。彼のうしろにいたのは早瀬理子だった。彼女は唇だけを小さく動かして、囁くように言った。

「なにも言っちゃだめよ」

「理子さんに帰ってもらうように言いましょう。それとも彼女に電話に出てもらいましょうか」

と、信介は理子に手をつかまれたまま石井講師に言った。

「いや、べつに急用もないから」

石井講師はそう言ふと、向こうのほうからガシャリと電話を切つたのだ。気の毒そうな信介に理子はどうなずいて、かすかにほほえむと、

「いいのよ、伊吹くん。あたし、自分ひとりのことであの人にいろいろ心配かけたくないの」

「でも、これは石井さんにも関係のあることでしょ」

「あたしのしたい通りにさせて頂戴<sup>ちやうだい</sup>」

彼女はそう言くと、血の氣のない顔で左右に首をふり、ゆっくり毛布を片づけると帰り仕度をしはじめた。

「なんなら泊ってらしたらどうです。ぼくは廊下に寝ますから」

「いいの」

理子は首を振って、信介をみつめた。ひどくつきつめた目つきだった。

「それより、さっきのお願い、きいてくださる？ 女独りであんな病院へ行くってことが、あたしにはたまらなく屈辱的なことなの。あなた、いやかもしれないけれど、ぜひ来てほしいわ」

「行きます」

信介は理子がひどく可哀想になって、うなずいて言った。「ぼくがつきそって行ってちゃんとやりますよ。安心してください」

「ありがとう」

理子はやや湿った感じの目で信介を眺め、それからほんと大きなため息を吐くと、玄関から出て行った。それが昨日の出来事だった。

へどうしたんだろう。もう十五分も過ぎている――

信介は昨夜のそんな理子とのことを思いおこしながら改札口の上の時計を見あげた。

へひょっとしたら、こないのかもしれない」

昨晩はあんなにきっぱりと引き受けはしたものの、やはり重荷に感じられる役目だった。生れてはじめて産婦人科の病院へ、女を連れて行くのである。待合室の客たちや、看護婦や、医師らは、きつと自分のことを年上の女を妊娠させたドン・ファン学生という目で見るとちがいない。そう思えば身のすくむ気がした。

一体、どんな顔をして手術の終るまで待っていればいいのか？ それにもしも万一のことがあった場合は、自分はどうすればいいのだろうか？

考えれば考えるほど気が重くなってくる。えらいことを引き受けたものだ、と彼はため息をついた。へあの人が現われなければいい」

そう思う気持のほうに彼の内部で次第に強くなってきた。

「信介さん」

そのとき思いがけず背後から女の声をした。振り返ると、織江が同僚らしい派手な恰好の娘と二人で、笑いながら立っているのだ。二人とも化粧が濃く、どこか下品な感じが身辺に漂っていた。

「なんだ、織江か」

「いまお店の用事でそのへんまで買物にきたのよ。信介さんは授業に出るところなの？」

織江はいかにも都会慣れしたような標準語で喋った。同僚の女の子の手前、ことさらそう振舞っているようだった。そんな彼女のどこか軽薄な感じが、信介には愉快ではなかった。

「いや、ちょっと用事があって人を待ってるんだ」

「そう。帰りにお店に寄ってよ。新しいベルリン・フィルのレコードがはいったわ。たまには信介さんもクラシックぐらい聞きにきたらいいのに」

「ベルリン・フィルだって？」

信介はあっけにとられて織江の得意そうな顔を眺めた。これまで織江の口からは美空ひばりと大川橋蔵の名前ぐらいいしか聞いたことはなかったのだ。へばロックンという、文学青年や劇団の学生たちがよく集る名曲喫茶に住込みで勤めているとはいえ、織江の口から外国のオーケストラの名前など聞くとは、彼は夢にも思わなかったのである。

「信介さんは、きつとショスタコーヴィッチの〈五番〉が気に入ると思うわ。うちのお客さんたち、みんなすぐく音楽にぐわしい学生さんたちばかりなのよ。コーヒーはまあまあだけど、素敵なお店なの、雰囲気は最高ね」

ね、と織江は隣りに立って黙っている長身の女の子に相槌を求めて振り返った。

「おれ、いそぐから」と信介は織江に言った。彼は一刻も早く彼女たちと別れたかったのだ。

「じゃあ、きつとよ。待ってるわ」

待ってるわ、という言葉だけ、織江は真剣なまなざしになって念を押した。それから手をあげて離れて行った。落下傘みたいに広がったスカートの下の白い四本の脚を彼は見送った。

へ理子さんと一緒にどこに出くわさなくてよかった」

信介は何となくほっとした気持ちで額の汗をぬぐった。その時、少し離れた場所に立って、じっとこ